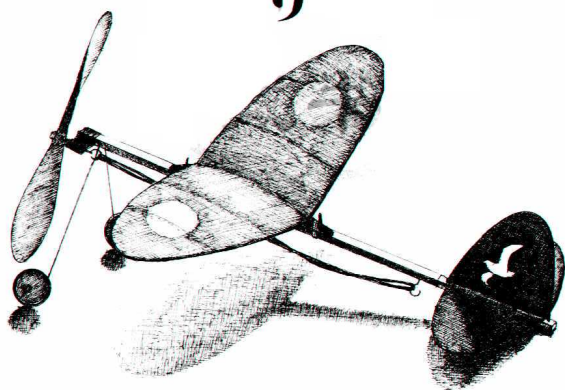


ビンボー
ひまあり
松下竜二



ビンボーひまわり



松下竜二

筑摩書房

松下竜一（まつした・りゅういち）

一九三七年大分県中津市に生まれる。豆腐屋自営をへて、作家となる。一方で、豊前火力発電所建設反対運動を契機に市民運動をはじめ、リーダーとなる。この運動の機関誌「草の根通信」は、一九七三年に創刊され、現在も刊行されている。本書は、この「草の根通信」一九九七年十一月号から二〇〇〇年三月号に掲載されたものなどに加筆した作品である。小社刊『底ぬけビンボー暮らし』『本日もビンボーなり』の続篇にあたる。

ビンボーひまあり

二〇〇〇年十二月十日 第一刷発行

著者 松下竜一

発行者 菊池明郎

印刷 星野精版印刷
製本 鈴木製本所

発行所 筑摩書房

〒二二八七五 東京都台東区蔵前二五三

振替〇二六〇一八一四二三

ご注文・お問い合わせ、乱丁・落丁本の交換は左記宛へ。
〒三三八五五 大宮市楠引町二一六 筑摩書房サービスセンター
TEL 〇四八五五・二〇五二

目次

一	離れられない	7
二	困惑、また困惑	13
三	「女神の天秤」	19
四	思いだしごっこ	25
五	貧者の蘭	31
六	一通の祝電に始まって	37
七	そんなに熱心にならないでよ	43
八	あれは笑わされたのです	49
九	たくらみ	54
十	娘が選んだのは……	60
十一	病気との「根くらべ」	66
十二	沢山の友情をいただいて	72

十三	拳さんの休日
十四	花嫁の父は泣かない
十五	ナノミも候補に
十六	「もう、うまれたんよ」
十七	六十二歳の抵抗
十八	もうテレビは御免です
十九	居候を歓迎
二十	邪心うごめく
二十一	夕風に吹かれながら
二十二	月下美人ひらく
二十三	八月十六日の夜に
二十四	Shall We ダンス?

二十五 傘の人？

二十六 えーっ、また「傘の人」？

二十七 ウーン、これは断れない

二十八 最期の満月を仰いで

二十九 真夜中の天使

「あとがき」にかえて

ビンボーひまあり

装画・高瀬省三

一 離れられない

先のことなど全く考えずに（だって考えようがないのだから）、とりあえず一年一年を^し凌いでいる松下センセに、突然将来の「設計図」を問いつけてきたのは長男の健一だった。

「うーん、おまえのいいようにしてくれ、おまえの選択に従うから」

こういう現実問題になると手も足も出なくなる松下センセは、あっけなく自己判断を放棄してすべての選択を息子にゆだねるしかない。

「おかあさんも、いいんやな」

健一に念を押された細君も、こつくりとうなずいた。

健一が土地を買って家を建てようかといひ始めたのは、二カ月ほど前からである。現在、息子夫婦は市内のマンションに入居しているが駐車場付き二DKの家賃が五万円で、手ぜまな感はいなめない。子供が生まれたら、たちまち困るだろう。

「どうせ毎月それだけの家賃を払うのなら、思い切ってローンで家を建てた方がいいんじゃないか」と勧めたのは、息子の妻の両親だったという。息子は市内の眼科医院に付属するコンタクトの店に勤めているので、転勤の心配はない。

「ローンを組むなら、少しでも若いときの方がいいんだから」といわれて、健一はにわかには思い立つことになった。この十一月四日を迎えれば健一も満二十九歳となる。自己資金は全くないのですべてを借金に負うことになり、いまから始めて六十歳まで払い続けるというのだから、松下センセには気の遠くなるようなプランである。

いま、夫婦で市内を中心に安い土地を物色しているようだが、その選択にあたって「おとうさん、おかあさんの条件」を出してくれというのだ。長男である健一は、先では「老いたる」松下センセと細君と共に暮らすと決めていて、そのために建て増し可能な百坪の土地を探しているのだが、「おとうさん、おかあさんがいやだと思う土地は選びたくないから、いやな条件、好みの条件を出してほしい」という。いくらそういわれても、一円の援助もしてやれない松下センセとしては、勝手な条件をつけて息子を困らせるわけにはいかない。「おまえたちの選択に一切まかせるから」と答えるしかないのだ。

実はこの話には前提がある。

将来的には（多分、十年以内に）松下センセは現在居住している船場町の家を立ち退かねばならないのだ。

中津市の福沢諭吉旧邸を訪ねて来た人は記憶されているかと思うが、福沢通りという広い通りが旧邸のある公園へと曲がる辻を境にして、狭い通りへと変わっている。海岸線へと延びるこの狭い通りを広い福沢通り並みに拡張しようという道路計画は早くから出ていて、それが実施されれば一番先に拡張工事につくかかるのが、船場町の入口にある松下センセ宅なのだ。

およそ道路から二間分（三・六m）を削られることになり、松下センセ夫妻が居間兼書斎兼応接間兼食堂兼寝室に常用している一番主要な表の間と玄関の庭が、そっくり削り取られることになる。松下センセ宅はもともと二十五坪しかない狭い土地でしかも奥行きがないので、そのおよそ三分の一強を削り

取られてしまえば、ここに住むことはもはやできない。

どうせ立ち退かねばならないのなら、新しい土地でいっしょに暮らそうというのが健一の考えである。とりあえずは自分たちだけの家を建てておくが、船場町を立ち退く時点で建て増しができるだけの土地を確保しておこうというのだ。松下センセにむかつてはいわないが、細君には「おとうさんの病気のことを思うと、やっぱりできるだけそばで暮らさないと心配だから」といつてくれているらしい。

少し辺鄙なことを我慢すれば、市の郊外あたりには坪単価六万円位の土地があるという。

「いいよ。どこだっていいよ」

息子夫婦に気を遣わせまいとして、松下センセつとめて明るく答えたのだった……。

朝夕の冷え込みが厳しくなってきた、さっそく松下センセの喘鳴ぜんめいが始まっている。そして松下センセの喘鳴が始まる頃になると、きつと山国川の河口にカモメやカモが戻って来ることになっている。

はるばるとカムチャッカからカモメの第一陣が帰って来たのは、十月十二日だった。その翌日にはカモの第一陣が川面を低く飛んでいた。いずれもまだ先遣隊せんけんたいといった小グループである。

へそろそろカモメたちにパンを撒く季節になりましたね」といった便りを読者からもちいたでいるが、松下センセと細君がパン屑撒きを始めるのは十一月に入ってからなので、もう少し先になる。

十月十七日午前十時前、山国橋の下石段に座って眼下の満潮（大潮なのだ）の川面をみつめていた松下センセは、とうとう細君に打明けた。

「やっぱり、おれはこの河口から離れられないよ」

細君の顔にふっと笑いが浮かんだ。

「うちはね、あんたがいつそれをいいだすかと思ってたわ。——うちだって、この川から離れたくないわ」

健一にはどこに移ってもいいよと答えてきたのだが、それがどこに移るのであっても山国川の河口から遠ざかることを意味しているのだ。（この周辺の土地価は意外に高い）

こうして毎日二人で五匹の犬を連れて来て眺めているこの河口の風景と別れるのかと思うと、さながら故郷を喪うような寂寥感に襲われる。

松下センセはこれまでの全生涯を、この河口の風景に浸って生きてきたのだ。細君にいたっては、この河口のデルタ小祝島（こいわじま）で生まれて育ち、橋一つを渡って松下センセに嫁いで来たのだ。

かつてある新聞が「青春紀行」というシリーズに松下センセを登場させたとき、それは若い日の思い出を刻んだ異郷（あるいは遠い故郷）を語る企画であったのに、中津の町から離れたことのない松下センセは、家から下駄を突っかけて五分の距離にある山国川の河口を「わが青春の風景」として語るしかなかった。ここに抄録しておこう――

*

大分県と福岡県の県境となっている山国川が周防灘へと注ぐ河口を、小さなデルタが扼（ぐさ）している。

河口の流れはこのデルタで二分され、福岡県側の岸辺を洗うのが本流で、中津城の石垣の裾辺を洗う分流は中津川が正式の名称らしい。しかし、土地の者は「北門の海」としか呼ばない。城の北門に面した流れだからだが、それにしても海と呼ぶのが僭称（せんしょう）でありすぎるほどの、狭い川幅ではない。

デルタへは、この分流の側だけに二本の橋がかかっている。ここまでが大分県中津市の内なのだから。このデルタ――大分県中津市小祝と呼ばれる漁師町が、私の豆腐を配達して行く商圈で、デルタの外周を囲む高い土手の道を、来る日も来る日も往き来し続けて、私の二十代は過ぎていった。今でこそ土手の道も舗装されたが、その頃の窪みだらけの石ころ道は、どんなにゆっくりと自転車をこいでも、き

つと何丁かの豆腐をひび割れさせた。

漁師町の朝は早い。小さなデルタの中の迷路のような露地を縫って、店々を起こしながら豆腐を配って廻る時刻、冬であれば空には未だ冴えた月が残っていた。

五軒の小店を一巡して土手を帰って来る頃、ようやく沖の空に乳色がにじみ、川上からは目覚めの早い白鷺が一羽二羽と翔んで来る。深夜といってもいい午前二時、三時に起き出て、暗い眼をして働いている私に未明の河口の風景は、寒風の中でもなおまぎれもない一日の最初の陶酔を与えてくれるのが常だった。

その陶酔をどう説明すればいいのだろう。たとえば、まだ未明の色の薄々となずんでいる磧^{かわら}で、配りの少年達が囲んでいる焚火の色を土手から見降ろすだけで、私の陶酔は一気に始まる。「まるで、ベージンの草野だ」と呟きながら。

豆乳の煮上がるまでを待つ深夜の仕事場で、わずかに読み進めているツルゲーネフの『獵人日記』の中にベージンの草野は拡がっている。獵人が切崖から見降ろした夜の草野に一筋の川が鈍く光り、そのほとりに馬を見張る少年達の焚火が燃えている。『獵人日記』の印象的なロシアの風景と、眼前の河口の景とが何の違和もなく重なっていったのも、その頃の孤独な感性が、まさに青春という瑞々^{みずみず}しさに濡れていたからだろう。

*

「——ずっと考えてたんだが……健一の思いやりは嬉しいけど、やっぱりいまの所に残ろうと思うんだ。それだったら、これからもこの河口と離れなくていいんだから」

松下センセ、対岸の近くに群れて浮いているカモたちがつくる波紋に視線をやりながら、細君に語り

かける。

「でも……三分の一も削り取られたら、あそこには住めないやろ？」

「だからちっちゃな家に建て替えれば、住めないことはないと思うんだ。どうせもう夫婦二人なんだし。要らない物はどんどん整理して、物もほとんど持たなきゃいいんだ。おれも本を全部処分するから……」

「そうやね。玄関の庭だって、自転車二台置かれればいいんやし……」

「この河口から離れなくてすむんだったら、どんな小さな家だっていいじゃないか」

「あっ、だけど——」

細君がはっとしたように松下センセに顔を向けた。「犬たちはどうなるの？ 六匹の犬たちの居場所はあるんかしら。それが問題よ」

「アハハハ。そんな頃にまだ六匹も犬がいるかどうかからんが……たとえ六匹いても犬たちの居場所は確保するよ。——二階建てにして、一階を犬たちに空け渡すとか……」

松下センセ、立ち退き料を当てにした勝手な設計を思い描いてみせる。

「でも……なんだかケンちゃんにはいいにくいなあ。せつかくいっしょに住もうといってくれてるのに……」

「おれの口からいうよ。ケンのことだから、おれたちがこの河口から離れられない気持はわかってくれるよ」

「そうやね。そうすればケンちゃんだってむりをして百坪も土地を買わなくても、いいんだもんね」

「おい、みんな帰るぞ！」

遠くまで行っている犬たちを呼び集めて川辺を戻りながら、早くも松下センセの脳裡にはこれから帰

って行く、小さなとても小さな箱庭のような家が想い浮かんでいるのだった。

(一九九七・十二)

二 困惑、また困惑

世の中にはとんでもないことを思いつく人もいるもので、松下センセの全集を出そうというのである。最初のうちはなんの現実性もない話として聞きながっていたのだが、なんとその企画を出版会議で通してしまったというのだから、啞然としてしまう。

「なんとか、やめてもらえませんか。いくらなんでも、わたしには重荷です」

ひたすら辞退しようとする松下センセに、「あなたはなんにも心配しないで下さい。成算あつての企画ですから」といつてとりあわない。

それでもいずれ立ち消えになるのだろうと、知らぬ顔をきめこんでいる松下センセに業を煮やしたのか、この企画立案者は松下センセが咯血入院中の病室まで来て、ベッドの傍で企画書をひろげてみせるのだった。

「各巻にはさみこむ月報に執筆していただく方々のリストを三十名ほど考えてみましたから、見て下さい」

井出孫六、鎌田慧、川原一之、佐高信、俵万智、落合恵子、緒形拳、立松和平、岡部伊都子、笠原和夫……。

点滴注射につながれた身で、松下センセは茫然とリストに並ぶ名前をみつめていた。

「それとですね、底本を決めねばならないんですが……たとえば『豆腐屋の四季』の場合、どれを底本

にしましょうか」

そんなことを問われて、松下センセはどきまぎして呟くしかなかった。

「わたし如きの作品に、底本なんて……」

一つの作品でも、最初に雑誌に発表した初出時とそれを単行本にしたとき、更に版を改めたときなどで多少の書き変えがあったりするので、全集に組む場合にはどれを底本にするかを定めねばならない。

『豆腐屋の四季』でいえば、自費出版本と講談社版と講談社文庫版の三種があるわけで、この三者のどれを全集として残すのかということである。

文学史に名を残すような作家の作品ともなると、たった一行（いや、平仮名一字でさえ）の異同が解釈検討の対象になったりしかねず、それゆえに底本を決めるということが大事になってくるのだが、松下センセ如きの作品では本人自身がそんなこだわりを毫も抱いていないのだから、底本はなどといわれるとどきまぎしてしまふ。

さながら序二段あたりのまだ痩せた貧相な相撲取りが、なぜか突然横綱の綱を締められたような困惑といったらしいのだろうか。

こんなにも松下センセを困惑させているのが、河出書房新社の編集者長田洋おきだ一氏である。

長田氏との出会いは、一九八四年春までさかのぼる。

雑誌「文芸」の編集者と名乗る長田氏から電話がかかってきたときのとまどいを、いまでも覚えていゐる。「文芸」といえば文壇の一翼をになう純文学雑誌であつて、およそ松下センセとは無縁な存在である。

「あなたのような作家の存在にこれまで気づかなかつたことを、編集者として恥じています」といった意味のことを、いきなり告げられて松下センセは大照れに照れたものだ。